
東方遊行聖物語

白銀星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方遊行聖物語

【NZコード】

N6645M

【作者名】

白銀星

【あらすじ】

主人公の白聖は昔、命蓮の姉として、僧侶として修行に励み生活をしていた。しかし後に死を恐れ人であるのをやめてしまった。そんなある日、彼女は遊行の途中、一つの船宿を見つけた。そこに待ち構えていたのは・・・。初投稿です。なにかと肩苦しい作品ですが読んでいただけたら光栄です。そしてこうした方がいい、こんな感じに書いてほしいなど意見をくださると光栄です。

因幡の船宿（前書き）

この作品は自分の東方設定の解釈が多々・・・というかかなりある
気がしますがご了承ください。

因幡の船宿

白兎海岸、昔の因幡国の國の北東、今で言つて鳥取県の岩見町に位置するこの場所に私はいた。

遊行（修行のため各地を巡り歩くこと）・・・とつこでこそいに出没する舟幽靈ムラサの退治の依頼のために隠岐国（島根県上部に在る島々）へ行くためだ。

因みにムラサは隠岐半島付近の船を沈めるため隠岐国と本土の通行を遮る障害物の一つでもあり、よほどのことがない限りそこへ行く者たちはムラサの退治を要求されていた。

つまり隠岐国に行くならついでに。という感じの命令であった。しかもムラサの退治例は極めて少かつた。

それもそのはず、退治方法も夜、夜光虫（海上に浮遊し、青白い光を放つ虫）で光輝く海の中、ボーッと光ながら丸く固まってるものを見つけ出しそれめがけて先端に包丁などつけた竿で海面を切りまくるといつ曖昧な方法だ。成功するわけがない。

とにかく私はこの因幡の地にいた。そして一つの建物を田の前に立っていた。本当に質素な船宿（船による運送を行う店）を前に・・・とにかく何か用があるとか思い入れがあるわけではない。ただ気にな

つたのだ。

おそらく生き物全般は経験したことがあるだろう、行つたことも来たこともないのになぜかこの地を知つてゐる。そう、今でいう「デジヤブ」といわれるものだ。

しかし、今回のはただの「デジヤブ」ではなかつた。そう、何か私を呼んでいるような・・・
私を必要としているような、そんな感覚に陥つたのだ。

多少考え込んだ内中に入つてみた。 考えても何も解決しないと思つたから。

「いらっしゃい」一人の少女が疲れたような表情で言つた。

「どうやら中は少女一人のようだ。 おそらく他の者は他の宿舎にでも帰つたのだろう。

「申し訳ないけど船は動かせませんよ」少女は続けて言つた。

「いえ、船に用はないの。 ただ・・・泊めてもらいたいの」

「はっ？」

自分でも何言つてゐのかよくわからなかつた。 とくに用もないから思いつきで言つただけだ。

少女は少し考え込んだ。「あなたは人間・・・それとも人間をやめた者?」

「！？珍しい質問ね。私は昔の僧侶。つまりは人間をやめた者です」

私は先走って言ってしまった。

すぐに私はこの発言に後悔した。

おそらく人間をやめた者というのは妖怪を、つまり少女は人間か妖怪かを聞いたのだ。

仮に少女が人間なら、妖怪を恐れ私を追い払うだろう。

妖怪だとしたら妖怪退治を行う人間を恐れるはずだ。

しかし私は妖怪であり僧侶、つまり両方であると言ってしまった。事実ではあるが、明らかに追い出される発言をしてしまったのだ。

「なら泊まらない方がいいわよ

「どうして？」

「私にからんだ人、みんな不幸になるから

少女は笑つて言つてみせた。

おそらく間接的に宿泊を拒んでいるのだろう。

しかしそう簡単に自分にからむと不幸などと笑つて言えるものではない。

しかも店の経営者だ。このような発言は収入を減らしかねない。

しかしこれは別のこととも表してた。

少女は嫌われて当たり前の存在なのだ。つまりは妖怪を意味していた。

妖怪なら収入が多少減つても生活できる。

もしかしたら人喰い妖怪で乗客を襲つて生活をしているのかもしれない。

この場合、私が人間でないこと、また自分が退治されるのを恐れて宿泊を拒んだのだろう。

「あなたは迷信好きね。あいにく私はそういう迷信を信じないの」

「！？珍しい坊さんもいるものね。坊さんなんて仏という迷信を信じて修行してる人ばかりだと思ってたわ」

「いいえ。仏といつ迷信を使って悪霊といつ迷信を追い払うのが僧如の仕事よ」

「あなたは坊さんとしては一流ね。悪霊といつ悪い迷信を信じてこそ、仏という善き迷信が輝いて見えるのよ。妖怪といつ悪き者がいるから、神様といつ善き方が輝いて見えるのと同じ」

「では・・・、悪き者と善き者の区別はどこにあるのでしょうか？」
悪い人も善い人も人にかわりはない。ならば神様も妖怪も同じようなものではないでしょうか？」

「？！話が矛盾してるわよ。仏を信じ、妖怪を信じるのが僧如でなかつたの？」

「矛盾していませんよ。私は昔の僧如。しかし今は仏も妖怪も信じている、ただそれだけです」

「・・・妖怪も仏のように扱います。と言いたいわけ？」

「ただ・・・妖怪という迷信が不幸という迷信にからわれてはいけませんね」

しばらく沈黙が続いた。

しかし少女はいつのまにか私に対する拒否反応を失い、ただじっとこちらを見つめていた。

「ふふっ、あははははは！」少女は突然笑い始めた。
「妖怪は不幸を信じちゃいけないのね。勉強になるわ。・・・でも僧侶として妖怪退治をしてきたあなたに仏と妖怪を同一視できるのかしら？」

「できるように私は今修行をしているのです」

私は笑つて言つてみせた。

「泊まりたいんでしょ。泊まつていきなさい」

「あら、妖怪退治を泊まらせていののかしら」

「元なら許しますわ。それに常にそういう想つてなことそんなこと笑つて言えるものではありません」

少女は妙に上機嫌になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6645m/>

東方遊行聖物語

2010年10月8日12時39分発行